

日常生活の車いす体験からスポーツとしての車いすバドミントン体験へ「パラバドミントンを体験しよう！」

学校名 山口市立大殿小学校（山口県）4、5年

全校児童数 625名（男子330名 女子295名）

対象児童数 200名（男子109名 女子91名）

（本実践に係る問合せ先）

電話番号 083（922）0343

学校メールアドレス ohdono-e@yamaguchi-ygc.ed.jp

1 実践（研究）のねらい

- （1）元日本パラバドミントン代表選手との交流を通して、個人の特性に応じてスポーツに親しみ、豊かな人生を送っていることを知り、パラスポーツに関する関心・意欲を高める。
- （2）障害者と健常者とがパラスポーツを一緒に楽しむことを通して、共生社会の参画者としての意識を高め、課題の解決に向けた実践的な態度を育てる。

○課題を解決するために実践した具体的な取組について

1 体験学習の効果を高めるための事前学習

総合的な学習の時間で福祉について学習し、通常の子供たちと同じく、車椅子体験を通し、車椅子についての基本的な知識や操作方法だけではなく、車椅子利用時の課題や、相手に対する思いやりの心について学習した。また、体に不自由なところがあっても、車椅子を利用し、積極的に外出したり、社会参加したりすることについての大切さについて学習した。

さらに、図書室のオリンピック、パラリンピックコーナーの本やインターネットを使って、オリンピック、パラリンピックの歴史や意義について学習した。

2 パラスポーツ体験学習「パラバドミントンを体験しよう！」の実施

講演、体験学習「パラバドミントンを体験しよう！」

講師：元日本パラバドミントン代表選手 江上陽子（えがみようこ）氏（他5名）

オリンピックやパラリンピックについての基本的な知識について説明を受けた後に、講師が車椅子バドミントンを始めた経緯や、パラバドミントンについての説明などのお話を聞いた。その後、10台の競技用の車椅子に児童や教員が交代で乗り、パラスポーツを体験した。

児童は、競技用の車椅子に乗るのは初めてであった。最初は操作に戸惑うこともあったが、慣れてくると、素早い動きもできるようになった。

○成果の意義

- 1 道具や環境を整えば、障害があっても、好きなスポーツを楽しめることを実感することができた。
- 2 これからの共生社会を構築していく上でのスポーツの果たす役割について、児童がそれぞれに考え、自分なりの思いや考えをもつことができた。

○今後の課題

- 1 実際に出場するアスリートに焦点を当てたキャリア教育の推進（道徳や特別活動における「パラリンピック教育教材」等の活用を含む）。
- 2 運動に対する児童の関心、意欲が継続するような具体的な取組の実施。

○研究内容

事前学習としての「福祉教育」の取組①

車椅子の基本的な操作を学習しました。



事前学習としての「福祉教育」の取組②

相手の気持ちを考えて操作しました。



パラスポーツ体験学習①

江上陽子選手による講話と実演を受けました。



パラスポーツ体験学習②

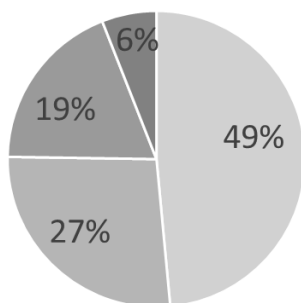
車椅子バドミントンを体験しました。



体験学習後の児童の意見・感想（アンケートより）

体験学習後に振り返りを行った。

パラバドミントン日本代表選手に教えていただいたことにより、オリンピックやパラリンピックに興味をわきましたか。



- とても興味がわいた
- 興味がわいた
- 少し興味がわいた
- 興味がわかなかった

※体験を実施したことにより、94%の児童の興味が向上した。

【児童の意見・感想（抜粋）】

「私は車椅子に乗る前に上手にできるか不安だったけど、江上選手に優しく教えてもらって、できたときはうれしかったです。この車椅子バドミントンのことを、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。」

「目の前で、大迫力の車椅子バドミントンを見ることができ、びっくりしました。こんなにすごいとは思いませんでした。2020年のオリンピックやパラリンピックが楽しみです。」

今後の取組について

～本実践終了後の学校の取組の方向性、内容について～

○来年度も4年生を対象に総合的な学習の時間で福祉学習を位置づけ、単に福祉の視点からではなく、人生を楽しむ手段の一つとしての障害者スポーツの理解を促すような活動を行っていきたい。

○オリンピックやパラリンピックのアスリートに焦点をあてた道徳や特別活動を通して、児童自身がこれからのよりよい生き方を考え、自分の目標に向けて主体的に学ぶ姿勢を養いたい。